HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	思い出はどこから ： 出来事の記憶と想起
Author(s)	仲, 真紀子
Description	第4章.
Relation	発達心理学特論, 内田伸子; 氏家達夫編著, (放送大学大学院教材), ISBN: 9784595135132, pp.53-66
Issue Date	2007-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44746
Type	book part
File Information	HST2007_53-66.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第4章　思い出はどこから ——出来事の記憶と想起

仲　真紀子

幼児は2，3歳になると，見たことや体験したことを話すようになる。また，多くの大人にとって，過去を振り返り思い出すことができるのも2，3歳頃からの記憶である。日常的な些細な出来事から人生を左右するような重大な出来事まで，特定の時間，場所で起きた，体験や出来事の記憶は「自己」の履歴となり，現実感を維持し，将来への展望をつくりだす。このようなエピソード記憶の成立を支える要因は何か。体験を分かち合うことを促す対話，自己の感覚，そして，いつどこで体験したかという情報源の特定が重要な要因として考えられている。

4－1.　エピソード記憶の起源——「体験の記憶」はいつから？

いつ，どこで何をしたか，何を見たかといった体験の記憶はエピソード記憶と呼ばれる。エピソード記憶の特徴や発達について理解するには，まず，記憶にはどのような種類があるか，どのような特徴があるかを知る必要があるだろう。ここでは，まず，記憶の種類について概説し，その後でエピソード記憶がいつごろ，どのように発生してくるかを見ていこう。

●記憶の種類

記憶は大きく，非言語的な活動や操作を中心とする手続的記憶と，言葉を中心とする宣言的な記憶とに分けられる。私たちの知識のほとんどは手続的記憶であり，歩く，話す，食べる，飲む，運転する，読む，書く，料理するなどの知識もここに含まれる。こういった活動は，実行することは容易だが，それをどのように実行するのかを言語化することは難しい。そのため，こういった知識を手続的記憶と呼ぶ。これに対し，言葉を中心とする宣言的記憶は，いわば言語的に表現できる「内容」の記憶である。宣言的記憶はさらに，①事物の名称

や命題，事実に関する知識を含む意味記憶と，②自分が体験した出来事や思い出に関するエピソード記憶とに分けられる。

こういった記憶の種類は，神経学的な基盤をもつ。一般に，記憶は海馬と深い関わりをもっているが，手続に関する記憶は小脳との関わりが大きい。また，近年は脳のイメージングなどにより，記憶するとき（記銘），思い出すとき（検索）にどのような部位が活性化しているかが調べられるようになった。多くの研究が，意味記憶とエピソード記憶では異なる部位が活性化することを示唆している。例えば，カベザとナイバーグは275の実験研究をレビュウし，意味記憶課題（ある文字列が有意味であるか否かを判断する語彙判断課題や，単語と単語の意味の関連性の有無を判断させる意味関連性課題など）における脳の活性化は，記銘時も再生時も左半球で生じること，エピソード記憶課題（単語リストの学習や再生など）における活性化は記銘時は左半球だが，検索時は両半球か右半球で生じることを示している（Cabeza & Nyberg, 2000）。また，脳の特定の部位の損傷が意味記憶だけ，あるいはエピソード記憶だけを阻害するケースがあることからも，生理学的にも両者を分けることは妥当であるといえる。

先に述べたように，意味記憶には事物の名称や命題，事実に関する知識などが含まれる。「リンゴ」「バナナ」「ミカン」などの名称や，「ドリーは体細胞核移植によってつくられたクローン羊である」などの事実は，意味記憶である。ここには日々の日課や自伝的な情報（私は○○で生まれた）なども含まれる。これらは，いわば特定の文脈から切り離された，一般化あるいは抽象化された知識や概念だといえる。これに対し，エピソード記憶は，特定の時間や場所と結びついた，自分が体験した記憶を指す。昨日スーパーでリンゴを買った，今日の生物学の試験でミスしたなどの，一回限りの体験の記憶である。エピソード記憶には具体的な，例えばスーパーでのアナウンスやひやりとした空気，リンゴの重さやレジでのざわめき等が含まれる。いわば，ありありとした記憶である。

● エピソード記憶の発生

意味記憶とエピソード記憶では，どちらが先に発生するのだろうか。「このリンゴを食べた」「あのリンゴを買った」といった複数のエピソードから，リンゴの意味記憶が作られるというように，まずはエピソード記憶があり，そこか

ら中心的な意味や概念が抽出されて意味記憶が成立するように思えるかもしれない。しかし，多くの研究が，まずは手続的な記憶，そして意味記憶が発生し，エピソード記憶は比較的遅れて発現することを示唆している。

新生児であっても記憶力はある。胎内で聞いていたと思われる血流音などを聞かせると，泣きが静まるという研究もある。また，新生児に特定の香りをかがせ，2週間後に同じ香りか異なる香りを提示すると，前にかいだ香りの方に顔を向けるという（Swain, Zelazo, & Clifton, 1993）。しかし，赤ん坊が一回かぎりの体験をありありと思い出しているという保証はない。以前にかいだ香りに親近感をもち，顔を向けただけかもしれない。親近感（familiarity）という感覚は意味記憶の特徴だとされている。

ネルソン（Nelson, 1988）は，エミリーという2歳児の入眠前の発話を縦断的に記録し，幼児が自発的にどのようなことを話すかを調べた。その結果，2歳代では出来事や活動が現在形で，いわばルーチン（定型化した手順）のように語られることを示唆している。例えば，エミリーはミネソタに旅行に行ったが，そこでの一回限りの具体的事象は語られることはなかった。彼女は次のように発話している。

> 飛行場には荷物をもっていかなくちゃ。飛行場にいくときは何かをもっていかなくちゃ。もってないと飛行場には行けない。私を乗せてってくれる特別のバスがいる。そしてみんな，ビューン，ビューン，ビューン，ビューン，ビューン。［エミリー，28カ月］

「荷物をもって飛行場に行った」ではなく「飛行機には荷物をもっていかなくちゃ」，「特別のバスに乗って飛行場に行った」ではなく「私を乗せてってくれる特別のバスがいる」と話しているところに注意してもらいたい。こういった，「一般に～する」といった，出来事の一般的な系列のことをスクリプトと呼ぶ。ネルソン（Nelson, 2000）は，2歳代の幼児の発話は典型的にはスクリプトであるとしている。ネルソンのまとめを補充しながら示すと，以下のようになる。

- 2歳：エピソードの報告はスクリプト的であり，不特定の断片的情報が語られる。
- 3歳：具体的なエピソードが報告されるようになる。しかし，被暗示性が高

く，体験したこととそうでないこと（見たり聞いたりしただけのこと等）が入り混じることがある。

- 4歳：特定のエピソードがかなり長い期間（半年でも）残る。しかし，安定はしていない。
- 5歳：自分の体験としてのエピソードを報告できるようになり，被暗示性も低下する。

スクリプトについても，個々の具体的な出来事がまず保持され，それらに共通する情報が抽象化されてスクリプトが作られるように思えるかもしれない。しかし，幼児においては，出来事の個別的な情報は保持されにくく（あるいは保持されていたとしても報告されにくく），まずは一般的なスクリプトが作られるようである。そういったスクリプトに係留するかたちで，個別の具体的な体験が記憶されると考えられている。

4－2.　語られるエピソードの発達的変化

● エピソードの発達的変化

ヘイデン，ヘイン，ファイヴァッシュ（Haden, Haine, & Fivush, 1997）は，おおむね5歳くらいまでに，幼児は出来事の基本的な構成要素である時間，場所，登場人物，活動，説明や評価などを報告できるようになると述べている。

彼らは幼児における出来事の記憶の発達を調べるために，15組の幼児と父母を対象とし，縦断的に幼児—母親，幼児—父親，幼児—実験者の会話を記録した。パティと呼ばれる女児と実験者の40カ月時と70カ月時の会話を**表4-1**（→p.57）に示す（Fivush & Haden, 1997）。また，報告の発達的変化を調べるための指標を**表4-2**（→p.58）に示す。**図4-1**（→p.58）は，これらの指標に関する40カ月時，70カ月時の子どもたちの平均反応数である。

図4-1からは様々なことがらが読み取れる。まず，情報別に見ると，活動情報，記述情報が多く，その他の情報の相対的度数は小さい。「いつ，どこで，誰が，どう感じた」は全体を統括する情報であり，何度も言及する必要のない情報であろう。これに対し「どうした，何をした」といった活動情報やその場の状況を説明する記述情報は量が多い。これらの情報は，出来事をめぐる会話の中心をなしているといえるだろう。

表4-1　出来事に関する，幼児と実験者の会話（Fivush & Haden, 1997より）

サーカスに行った時のこと（40カ月）

子：　汽車に……ピエロが乗ってるの，見えた。
実験者：　まあ，汽車にピエロが乗っているのが見えたの？　それで？
子：　んと，サーカスに，いっぱいピエロがいたの……サーカスに，いっぱいインディアンもいたの。
実験者：　それからどうしたの？
子：　んと，音楽がいっぱいで……ピエロに火をかけたの。
実験者：　まあ，すごい。サーカスでは他にどんなことがあった？
子：　う～ん……音楽がうるさい，音楽がたくさんだったの。サーカスが終わって，ご飯食べるところで，食べたの。

エプコット・センターに行った時のこと（70カ月）

子：　うんと，エプコット・センターに行って，花火を見たの。それから中華レストラントに行ったの。エプコットには，いろんなレストランがあって，私たち中華に行ったんだ。食べたのはリブだけど。
実験者：　中華レストランでリブを食べたの？
子：　そう。中華にもリブがあるなんて知らなかったわ。洋食だと思ってた。だって，私，洋風のリブが好きなんだもん。でもリブは中華だったの。
実験者：　リブは中華だったのね。好きじゃなかったの？
子：　うん。でもデザートはまあまあ。ハチミツ以外はね。
実験者：　そう。エプコット・センターでは他に何かした？
子：　家に帰って寝たわ。
実験者：　寝たって？　その前に何もなかったの？　他に何があった？
子：　うんと，乗り物やなんかがある小さな遊園地のようなところに行ったよ。ティーカップに乗ったの。マッド・ティー・パーティ。
実験者：　ティーカップの乗り物とマッド・ティー・パーティ？
子：　うん。ティーカップ・パーティじゃなくってそう呼んでるみたい。だって，こういう小さなティーカップに乗って，座って，こんなのを回すの。そうすると，速く回るの。
実験者：　何だって？　これをどうするって？
子：　この前に座って。
実験者：　ああ，この前に座って。そうすると速く動くの？
子：　うん。だって小さなハンドルがあるから，それで速く回せるの。それからゆっくりも。で，こっちに回せば早くなって，反対に回すとゆっくりになるの。で，ママが気分悪くなっちゃった。うんと，速くすると，そして，うん，そう，ママと乗るときは，ゆっくりにしなくちゃならなかったの。速い方がよかったんだけど。
実験者：　速い方がよかったのね。でも，ママが気分悪くならないように，ゆっくりにしなくちゃならなかったのね。まあ，なんていい子なんでしょう。
子：　まあね。覚えてるのはこれだけ。
子：　スペース・マウンテンがよかったわ。そう，乗ったのよ。
実験者：　まあ。それはよかったわね。さあてと。
子：　ちょっと怖かったけど。でも目をつぶってたの。そして面白そうな乗り物が見えて。面白かった。

表4-2　出来事をめぐる会話の分析（Haden, Haine, Fivush, 1997）

カテゴリー	定義	例
活動	出来事中の活動	「お店まで歩いていった」
記述	状況，人，事物に関する客観的な詳細情報	「それは僕の箱だったんだ」
定位	出来事を時空間的文脈に位置づけるようなコメント情報，聞き手が出来事を理解するのを助けるような情報	
時空間情報	出来事が起きた場所や時間	「そのとき，君は病院にいた」
人物情報	出来事の最中にいた人物の名前	「ジンジャーがそこにいた」
評価	出来事に関する感情的，評価的情報	
内的状態	出来事に登場する人の感情や欲求（感情や欲求に関する会話文を含む）	「すべり台ですべりたかった」 「楽しかった」
強調	修飾を強める情報	「すごくおおきなボールだった」 「とってもとっても寒かった」
感情	事物，人物，出来事に関する主観的または感情的な言明	「痛かった」 「楽しかった」
重点	起きなかったことや，させられた事	「無理やり走らされた」

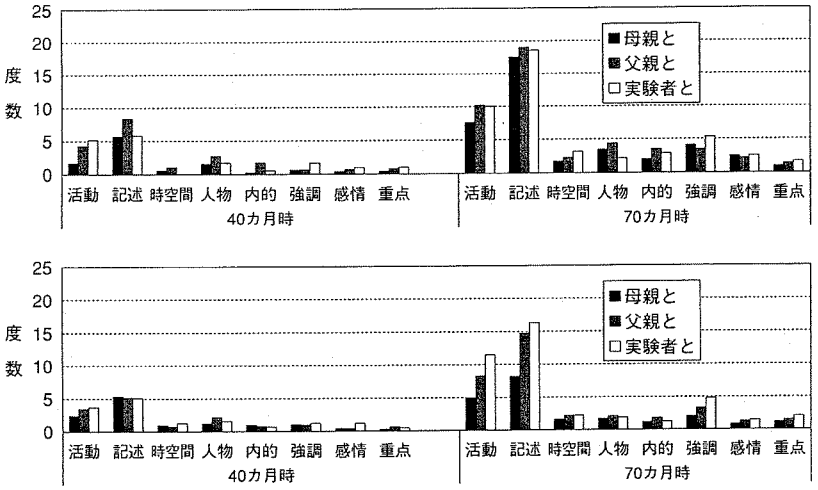

図4-1　母親，父親，実験者との会話：女児（上）と男児（下）
Haden, Haine & Fivush (1997) より作成。

発達的に見ると，女児も男児も，40カ月から70カ月にかけて，全体的に発話量が増加する。40カ月時の発話は平均14であるのに対し，70カ月時の発話は平均37であり，およそ3倍となっている。特に増加が著しいのは活動情報と記述情報である。これらの情報が年齢とともに増加し，詳細になっていくというのが，過去の出来事に関する報告の発達的特徴だといえるだろう。

記述情報には出来事の背景や文脈に関する情報も含まれる。70カ月にもなると，子どもは他者の視点に立ち，必要と思われる情報を適宜提供することができるようになる。母親との会話，父親との会話，実験者との会話を見てみると，70カ月時では，母親よりも父親や実験者との会話において情報量が多い傾向がある。一般に母親の方が子どもと接する時間が多い。父親や実験者に対する発話量が多いのは，文脈を知らない相手により多くの情報を提供しているためだと推察できる。

次に，性差を見てみよう。40カ月時では，女児は男児よりも約30%，70カ月時では約50%多く話している。特に記述情報が多く，また全体量は少ないが，人物，内的状態，感情に関する情報が，女児の方が多い。この研究に限らず，一般に女児の方が感情語を多く用いることが，母子対話の研究や語彙獲得の研究においても知られている。これが生得的な傾向によるものなのか，社会構成的なものなのか（例えば，女児の方が社会的交流を含む活動が多く，そのために他者の感情に気付きやすくなるのかもしれない）は現段階では不明である。同じく悲しい話題であっても，母親と娘では対人的な出来事がテーマになりやすく（「悲しい」が多い），母親と息子では個人の失敗や課題遂行にまつわる出来事が語られやすいという（「怒る，恐い」が多い）（Fivush & Keubli, 1997）。何を話題にし，何について話し合うかは，子どもが何に注意を払い，何を記銘し，何を想起するかを動機づける要因として機能するだろう。

この他，**図4-1**（→p.58）には示されていないが，ヘイデンたちは，報告される活動が単文ではなく，複文で表される度合いや，時間的関係（～した後で～した）や因果的関係（～したので～なった）が語られる度合いが増加することを示している。出来事の報告は，時系列や因果関係の理解に伴い，より複雑になっていく。

● エピソードを語る語彙

「いつ，どこで」などの時空間情報はエピソードを位置づけるために重要である。また，「楽しかった，嬉しかった，辛かった」などの評価情報も，個人にとってのエピソードを意味づける，大切な情報である。

これらの情報の獲得は比較的遅い。**図4-1**（→p.58）にも示される通り，時空間情報は40カ月時で0.5～0.7，70カ月時でも1.7～2.3程度である。つまり，時間や場所に関する発話は1つあるかないかということである。ピーターソンとマッケイブ（Peterson & McCabe, 1996）は，もう少し小さい年齢の幼児と母親との間で行われた出来事をめぐる会話を検討している。この研究における最年長児（41カ月児）においても，「いつ」が含まれた会話は32%，「どこで」が含まれた会話は41%であった。

方式は異なるが，我が国で日にちを表す語彙を調べた岩渕・村瀬（1976）の研究によっても，日にちを表す言葉の理解は遅いことが示唆される。この調査では，幼児の母親を対象とし，昨日，今日，明日といった語について「お子さんが正しく使えるものを○でかこんでください」と尋ねた。その結果，明日よりも昨日，あさってよりもおととといというように，過去を表す言葉の理解は遅く，「昨日」を理解していると母親が評定した割合は，3，4，5，6歳の順でそれぞれ29，66，85，95%，おととといでは順に0，9，26，46%であった。数日前，1週間前といった概念の獲得はもっと先になるだろう。

評価や感情を表す情報についても，獲得は相対的に遅いことが知られている。例えばアルドリッジとウッド（Aldridge & Wood, 1997）は，5歳児～成人までを対象に，人形を用いた小劇を見せ，その内容を言葉で説明してもらうという調査を行った。

実験者は，子どもの前で「すべり台をやりたい子どもがいるよ」と言いながら小人形を動かし，すべり台に乗せる。しかし人形は途中ですべり台から落ちてしまう。この様子を見せた後に，実験者は子どもに「このお人形，どんな気持ちかな？」と尋ねた。この他，集団遊びに加えてもらえない（ネガティブ），誕生パーティをやる（ポジティブ）などの小劇が用意された。**表4-3**（→p.61）は，各年齢の参加者が小劇の登場人物の気持ちを記述するのにどのような語彙を用いたかを示している。大人では延べ11語が用いられたが，5歳児が産出した感

表4-3　感情語の発達（Aldridge & Wood, 1997）

語彙	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	大人
嬉しい	8	10	8	10	10	8	10	8
悲しい	6	10	8	10	8	8	10	10
痛い	3	1	7	5	8	8	3	2
怒る	0	2	3	6	3	8	5	10
興奮	0	1	1	5	6	6	5	10
誇らしい	0	0	0	0	2	3	0	8
恐い	0	1	1	6	10	5	7	10
寂しい	0	0	1	1	0	0	0	1
恥ずかしい	0	0	0	0	0	0	0	1
不安	0	0	0	1	1	1	5	5
無理に	0	0	0	0	0	0	0	5

情語は「嬉しい，悲しい，痛い」の3語だけであった。8歳くらいまでは「嬉しい，悲しい」が大半を占めており，幼児，子どもの評価語彙には制約があることが分かる。

4－3. エピソード記憶を支えるもの――対話と自己と情報源

● 自己への気付きと対話

他の領域の認知発達と同様，エピソード記憶の発達にも，子ども自身の生物学的な発達（遺伝）と社会的な相互交渉（環境）の両方の要因が寄与している。ハーレイとリース（Harley & Reese, 1999）は，出来事の記憶に影響を及ぼす要因として，「幼児自身の自己の認識（自己への気付き）」と「母親の働きかけ」を検討している。

「自己の認識」はミラーテストを用いて調べる。これは，気付かれないように幼児の鼻にマーカーで印をつけておき，後で幼児に鏡を見せるという課題である。鏡を見せたとき，幼児が鏡の後ろを見たり鏡を触るのではなく，自分自身の鼻に手をやった場合，つまり鏡のなかにいるのは自分であると認識しているとみなせた場合，ミラーテストに通過したとされる。一方，「母親の働きかけ」については1回限りの出来事（飛行機に乗った，アヒルに餌をやったなど）について母子で会話してもらい，検討する。母親の働きかけと子どもの出来事に関する記憶の指標は，以下の通りである。

- **母親の働きかけ**：母親がどの程度新しい情報を引き出すオープン質問を行うか。例えば，「ヘリコプターに乗ったのは誰？」「パパはボートで何したかな？」といった質問（これを精緻化記憶質問と呼ぶ）を数え，出来事ごとの精緻化記憶質問数を母親の「記憶引き出しスタイル」の指標とする。精緻化記憶質問が多い母親（上位半数）をH精緻化母親，少ない母親（下位半数）をL精緻化母親とする（H，Lは，high，lowの略である）。
- **子どもの出来事の記憶(1)**：子どもがどの程度新しい情報を提供したか，ないしは出来事の新しい側面に話題を移したか（これを精緻化共有記憶と呼ぶ）。例えば，母親の「看護師さんは何をしたのかな？」に対する子どもの反応「お耳を見た」など。
- **子どもの出来事の記憶(2)**：子どもがどの程度母親の提供した情報を繰り返したか（これを反復共有記憶と呼ぶ）。例えば，母親が「写真にレイおじさんがいるでしょう？　写真のなかにいるのは誰かな？」などと尋ね，子どもが「レイおじさん」と答えた場合がこれに当たる。
- **子どもの出来事の記憶(3)**：幼児が25カ月と32カ月の時点では，子どもと実験者の会話も記録する。この会話では，母親に選んでもらったトピックについて，子どもから自発的な報告をもとめ（「もっとたくさんお話しして」），子どもがうまく話せない場合には手がかりを与える。実験者は手がかり以外の情報は提供せず，子どもが提供した新しい情報のみをカウントする（実験者は出来事の内容を知らないので，この記憶を精緻化独立記憶と呼ぶ）。

19カ月の時点においてミラーテストに通過した幼児（いち早く自己に気づいた幼児）の方がそうでない幼児よりも，「自分の体験」，「自分の思い出」に気付く度合いが高く，出来事の記憶の発達が著しいのではないか。また，早い時点において，幼児から出来事の報告を引き出そうと工夫していた母親（H精緻化母親）の子どもの方が，そうでない母親（L精緻化母親）の子どもよりも，後により多くの記憶を語るのではないか，というのが仮説であった。

「19カ月の時点で自己を認識していたか否か」×「H精緻化母親か，L精緻化母親か」の2×2の枠組みで検討したところ，19カ月の時点で自己を認識していた幼児の方が精緻化共有記憶の数は多く，その効果は特に32カ月の時点で大き

かった。また，19カ月の時点で自己を認識していた幼児は，25—32カ月間での，精緻化独立記憶の伸びが著しかった。つまり，自己への気付きは，エピソード記憶の発達と関わりがあるといえる。自己への気付きは「自分の体験」，「自分の記憶」といった意識を高め，エピソード記憶の記銘や保持，伝達に影響を及ぼすのだと考えることができる。

同様に，母親の働きかけの影響も見られた。H精緻化母親の子どもは，L精緻化母親の子どもよりも，精緻化共有記憶と反復共有記憶の数が多かった。

この他にも，母親の発話や記憶の引き出し方のスタイルが子どものエピソード記憶の産出に影響を及ぼすことを示した研究は多い（「コラム」参照，→p.66）。日々の体験のどのような側面に注目し，何を記銘し，何を人に伝えるかは，自己の形成に関わる個人的な活動である。と同時に，それは他者とエピソードを分かち合うという社会的な活動でもある。この2つの側面がエピソード記憶の発達に関わっているといえるだろう。

●情報源の理解

もう1つ，エピソード記憶と関わる認知的要因について検討しよう。意味記憶が親近感，あるいは「知っている」という感覚と強く結びついているのに対し，エピソード記憶は「(自分が) 見た，聞いた，体験した，覚えている，思い出せる」という感覚と強く結びついている。例えば，近所の美術館でシャガール展をやっているのを「知っている」というだけではエピソード記憶とは言わない。エピソード記憶には，「帰り道にそのポスターを見たので，シャガール展をやっているのを知っている」という，「『知っている』ことを知っている」メタ認知，あるいは想起意識が必要である。こういったメタ認知や想起意識はエピソード記憶の特徴の1つであり，その発達には情報源の理解の発達が大きく関与している。

パーナーとラフマン (Perner & Ruffman, 1995) らは，4～6歳の幼児を対象に，エピソード記憶を測定する課題と，情報源への気付きを調べる課題を行った。エピソード記憶は自由再生あるいは手がかり再生によって調べる。例えば，果物の絵が描いてあるカードを見せ，後で何が描かれていたかを思い出してもらう。一方，情報源への気付きは次のようないくつかの課題で検討した。

- **様相課題**：様相とは，視覚，触覚などの感覚の種類のことである。この課題では，例えば赤と緑のボールの2種類があることを子どもに示し，一方のボールを箱に入れる。箱はふたを開けて中を見るか，または横から手を入れて中を探ることができるようになっている。子どもに「どっちのボールが入っているかを調べるにはどうすればいいかな？ ふたを取って見てみるのがいいかな？ 手を入れて触ってみるのがいいかな？」と尋ねる（同様に，見かけが同じ固い事物と柔らかい事物などを用いて同じことを尋ねる）。これらの課題の目的は，色情報は見ることによって得られる，触覚情報は触ることによって得られるなど，情報と情報源の関係について子どもが理解しているかどうかを調べることである。例えば，何色かを調べるのに「触る！」などと子どもが答えた場合は，様相の理解がなされていないとされる。
- **知っているのか，推測したのか課題**：この課題では，まず，絵のついたカードを箱の中に入れる。その際，子どもの目の前で入れるか（見る条件），子どもには見せずに「星のカードを入れるよ」などと実験者が言葉かけをして入れるか（聞く条件），見せもせず何も言わずに入れるか（見ない・聞かない条件）する。次に，子どもに箱の中身を当てさせる。この際，わざと当たるように仕組んでおき，「どうして分かったの？」と尋ねる。見る条件では，「見てたから」，聞く条件では「聞こえたから」，見ない・聞かない条件では，「当てずっぽう」が正解となる。この課題に対し，実際には見てたから分かったのに「知ってたから」，実際には当てずっぽうなのに「分かったから」などと答えた場合，子どもは自分の体験を適切に参照していないということになる。

実験の結果，パーナーらは情報源課題の成績と，再生や手がかり再生などのエピソード記憶の成績には正の相関があることを見出した。つまり情報源を理解している度合いが高いほど，エピソード記憶の成績も高いことになる。この結果は，同時に調べた語彙テストの結果や知能テストの結果を差し引いても変わらなかった。

情報源の認識は自己の認識とも関わりがあることが知られている。自己の姿や自己の内的状態を上位から観察することのできる能力の発達は，社会的相互交渉と並び，エピソード記憶の発生を支えているといえるだろう。

【図書案内】

仲真紀子（2005）．子どもは出来事をどのように記憶し想起するか．内田伸子（編）*心理学—こころの不思議を解き明かす*．光生館．pp.131-159.

仲真紀子（2000）．3歳と4歳：年齢というバイアス，理念と個人の姿．岡本夏樹・麻生武（編）*年齢の心理学*．ミネルヴァ書房．pp. 143-175.

【学習の手引き】　（解答例はp.232）

1．エピソード記憶の形成に重要だと考えられる要因を，子どもの認知能力の発達と，言語的環境という観点から整理してまとめよ。

2．一般に，過去の出来事の記憶（エピソード）はどのような情報からなるだろうか。

【用語解説】

「被暗示性」　示唆，暗示，指示等の外部からの情報の影響を過度に受けやすい傾向性のことをいう。社会的要因（例えば，「見たでしょう？」と圧力をかけられると，「見た」と答えてしまうなど）と認知的要因（情報源を区別する能力が低く，見ていないものを「見た」かのように思ってしまうなど）によって生じるとされる。

「スクリプト」　シャンクとアベルソンが提唱した，事象の一般的な系列に関する知識のこと。例えば「レストランに行く」という系列は，店に入り，席に着き，メニューを選び，食事をして，会計をして出てくるという系列からなる。そこにはウェイターやウェイトレスなどの登場人物，テーブル，椅子，食器などの小道具も含まれる。スクリプトは抽象的な知識であり，ドレスコードのある高級レストランに行く場合も，屋台やファーストフード・ショップに行く場合も，基本的には上記のような系列情報が含まれる。

「想起意識」　思い出したという感じを指す。「この記憶は自らの体験に起因している」という感覚，ありありと思い出せる感じ，その時・その場に戻ったような感じであり，エピソード記憶の特徴である。オートノエティックな意識，リメンバー（remember）感ともいう。これに対し，意味記憶は「知っている，分かる」（know）という感覚，親近感（familiarity）を伴う。

■コラム　母子対話の質と子どもの発話

子どものエピソード記憶の発達には，母子対話などに見られる言語的環境が影響を及ぼす。どのような働きかけがエピソード記憶の保持や報告を豊かにするのだろうか。ファイヴァッシュとフロムホフ(Fivush and Fromhoff, 1988)は，2歳半の幼児と母親の対話を分析した。

まず，母親を発話が多いグループ(H発話母親)と少ないグループ(L発話母親)に分けて比較したところ，H発話母親は，「どこに行った？」，「誰と行った？」などの，記憶を尋ねる質問が多かった。

また，質問を前の質問を繰り返す「繰り返し質問」か，前の情報に新たな情報を付加し，質問する「精緻化質問」に分類したところ，L発話母親では繰り返し質問と精緻化質問が同程度であったが，H発話母親は繰り返し質問よりも精緻化質問が多かった。

さらに，L発話母親は，子どもから特定の情報を聞き出すと次に話題を切り替えるというスタイルであったのに対し，H母親は語りのストーリーラインを大切にし，出来事を詳しく聞き出すことに重点を置いていた(2つの会話の違いを**表**に示す)。

このことから，ファイヴァッシュらは，L発話母親の会話スタイルを「繰り返し型」，H発話母親の会話スタイルを「精緻化型」と名付けている。繰り返し型の会話では，会話が記憶クイズのようになりがちであるのに対し，精緻化型の会話では，母子が共同で過去を再現することが多かったという。事実，母親が言及しなかった新情報を幼児がどれだけ述べたかを調べたところ，H発話母親の子どもの発話量は，L発話母親の子どもの2倍であった。

[表：過去の出来事をめぐる会話]

L発話母親と子どもの会話

母：去年のクリスマスのこと覚えてる？
子：去年のクリスマス。
母：クリスマスに何もらった？　覚えてる？
子：何？
母：何も覚えてないのね。ダンプカーは？　ダンプカーのこと覚えてる？
子：うん。
母：他に何もらった？
子：何もらったっけ。
母：サーカスに行ったこと覚えてる？（と，次の質問に移る）

H発話母親と子どもの会話

母：赤ちゃん（弟）に初めて会った時，エリザベスおばさんが何をもってきてくれたか，覚えてる？　おばさん，何をもってきてくれたかな？
子：うん。
母：世界で一番好きなものでしょ？　大好きなお友達。誰だっけ？
子：赤ちゃんのディロン(弟)。
母：赤ちゃんのディロン？　ディロンが一番のお友達？
子：うん。
母：それはいいわね。ママはふわふわで茶色で，とっても柔らかいもののことを言ってたのよ。
子：うん。
母：そんなのをもらったのは最初……？
子：うん。
母：いつも誰と一緒に寝てるんだっけ？
子：テディベア。
母：そうね。